NEWS №115
APRIL 2023
WASEDA ARCHITECTURE

巻頭言

コラボラティブな都市デザインへ

有賀 隆
早稲田大学理工学術院教授／創造理工学部長・研究科長（苗1985）

都市は人々が集まって暮らす場であり、社会・経済活動が集積するビルト・エンバイロメント（物的環境）でもある。かつてルイス・マンフォード（*The Culture of Cities* 初版1938）は、それを「第一次集団」：共同体に属する家族や隣人など同質的な集団と、「目的結合体」：都市機能や都市活動など合理的な目的によって結びつく多元的な集団、の両者が複雑に結合する社会の物理的な形と論じた。我が国の都市の多くは、いま、この第一次集団の高齢化や減少がもたらす空き家や空き地の問題、そして目的結合体の基盤となってきた地域経済や産業の構造変化に起因する都市機能や土地利用の再編課題に直面している。従来の都市ストックを活かしつつ、持続可能な都市の変化をどのように方向付けていくのかという課題である。

他方、世の中ではシェアハウス、シェアオフィスなど、限られた空間や時間を分け合って利用し合う「シェア」の仕組みを基に、多くの利用者が共用できる魅力的な場が、建築や都市の再編整備の中で生み出されている。空間を共用することうした取り組みは、個別の建築や都市開発の範囲を越え、道路や公園など公共空間の再編整備でも実践され始めている。従来の行政管理を前提とした公共目的に限定されず、民間事業者などが新たに管理運営の担い手となり、周辺の関係権利者・事業者、市民利用者組織などと協働して、賑わい創出や歩行者回遊性の促進を図り、収益的なサービスも提供可能とする関連制度が整備されてきた。このように、複数の協働主体が空間と時間、新たな利活用の制度や方法、またその資金や財源などを提供し合う「コラボラティブ」な都市デザインは、共益的なアクティビティと価値を生み出し、その果実を社会に還元していく地域マネジメントとしても期待が高まっている。

こうしたコラボラティブな都市デザインでは、新たな利活用や空間コンテンツを仮設的に創り出し、その効果や影響を検証してから場所や空間の具体的な設計へフィードバックする社会実験のプロセスが効果を上げ始めている。空間や時間、制度や方法、資金や財源などを多様な協働主体が提供し合う、コラボラティブな都市デザインの可能性がいま大きく広がり始めているのである。

1——〔巻頭言〕コラボラティブな都市デザインへ——有賀 隆
2–3——〔特集〕旧渡辺甚吉邸移築プロジェクト　歴史的建造物の保存・再生活用
4——〔報告〕OBOG による仕事紹介・第二回職域幹事・新年会／合同クラス会 2022 報告
5——建築展報告／芸術展報告
6–7——〔稲門の風 十八〕特別企画：2050 年を見据えて飛躍を目指す早稲田のキャンパス——後藤春彦
8——春の大会ご案内／合同クラス会予告／主な会務の報告／訃報ほか

春の大会、6月2日（金）開催！

新型コロナウィルス等の影響により、
開催方法に変更が生じる可能性があります。

特集：旧渡辺甚吉邸移築プロジェクト

歴史的建造物の保存・再生活用

2022年3月、日本近代建築史上屈指の住宅作品と言われた旧渡辺甚吉邸（昭和9年竣工 東京都港区白金台。以下、甚吉邸）が、茨城県取手市の前田建設工業株式会社のICI総合センター内に移築された。甚吉邸は建設当時から今回の移築に至るまで、早稲田建築と関わり合いの強いプロジェクトであり、今回は稲門建築会事業委員会の主催による現地見学会と講演会も開催されたことから、その様子とともにレポートする。廣岡勇輝（広報委員会）

見学会の様子

2022年11月19日、応募いただいた約30名の方が見学会に訪れた。日建設計会長・稲門建築会会長の亀井忠夫氏（苗1977）による挨拶、前田建設工業の前田操治社長による甚吉邸の施設概要説明、中谷礼仁先生（苗1987）と栗生はるか氏（苗2004）による移築プロジェクトに至った経緯を説明いただいた後に、建物の見学を行った。併せて、移築工事中の様子や工事に携わった職人へのインタビュー内容をドキュメンタリーとしてまとめた映像も上演された。

旧渡辺甚吉邸とは

銀行業を営む岐阜・渡辺家の14代となる渡辺甚吉氏の私邸として、戦前日本の経済繁栄期に建設された。同郷出身の建築家・遠藤健三を伴い欧米見聞を行った後に、チューダー様式に基づき遠藤が設計し、照明器具などの細部装飾を早稲田大学教授の今和次郎に依頼し、かつ全体的な計画を明治後期より洋風住宅の啓蒙とその普及に尽力していたあめりか屋の技師長・山本拙郎が担当した。その後スリランカ駐日大使公邸、結婚式場として使い続けられ、現在まで当初の姿を奇跡的に留めている。また同作品は考現学者今和次郎の数少ない彼の高品質の装飾を確認できる最重要作品である。

プロジェクトに至った経緯

（見学会での説明より引用）

○栗生はるか氏

私が地域活動の一貫として、銭湯の保存・解体記録の活動をしていることから、知人に名邸宅が取り壊される話があると相談された。それが甚吉邸であることがわかり、これは一大事だと認識し、法政大学の陣内秀信先生をはじめ、藤森照信先生や中谷礼仁先生に相談を持ち掛けたことが、本プロジェクトに至った事の発端である。

まずは現地確認をすべきだと考え、当時甚吉邸は結婚式場として運営されていたので、結婚式を考えている人を装い、下見と称して現地に訪れた。

初めて現地を訪れたところ、これは絶対残さなくてはいけないという感銘を受けた。だが土地の売買契約はすでに進んでおり、２０１７年５月に解体されることも決まっていた。そのため新しい所有者に相談したところ、甚吉邸の調査に関して前向きな話をいただくことができ、解体の日程を延期して、調査の許可をいただくことができた。その後、早稲田大学・法政大学・神奈川大学の合同で、甚吉邸の実測調査を行い、記録として詳細な内容をまとめあげた。しかしながら、所有者側では保存・移築の活動はできないため、他で甚吉邸の引き取り手を探しても構わないとお話をいただいた。先生方をはじめ、色々な方に相談をしたものの、保存・移築に関する移築先や協力企業は見つからない状態が続いていた。解体期日が差し迫る中、２０１７年の６月に稲門建築会の懇親会で甚吉邸のプレゼンテーションを行い、そこでの御縁から前田建設工業との移築プロジェクトが具現化する運びとなる。

○中谷礼仁先生

普段、私自身は建物の保存活動はしていないのだが、甚吉邸の素晴らしさは博士時代から着目していたので、当時から何かあったら動きたいという気持ちを持っていた。建物の保存という意味で、本当はその場所に建物を保存したかったが、次善の策の中で最良の方法である移築というかたちで、今回実施できたことを心の底から感謝している。

こういった保存活動の中で大切なことは、個人で動かず、理解ある方々と連携することである。さらに保存活動では、多くの方々の協力が必要であり、平和な成果となることが大切だと思う。土地の所有者や前田建設工業といった、関わられてきたすべての方々が幸せになれるような状況を作るように努めることが僕の役目で、忍びの者のような活動をしてきた。

当初は、前田建設工業で建物の解体を行い、建物部材の保存だけをしておくという方針であったが、２０１８年に前田建設工業から移築というかたちで進めていきたいと話をいただいた。稲門建築会での活動がなければ、今回の移築に至らなかったと思っている。

●建物概要

建築主：前田建設工業株式会社
設計：前田建設工業一級建築士事務所、プレイスメディア、風基建設、山辺構造設計事務所
施工：前田建設工業　関東支店
所在地：茨城県取手市寺田５２７０
構造：木造、地上２階　塔屋１階
延床面：４２６．３４㎡
工期：２０２０年９月～２０２２年３月

右頁：外観全景。右上：１階広間、応接室。左上：食堂。
©傍島利浩
左下：見学会での講演風景。©前田建設工業

OBOGによる仕事紹介
第二回職域幹事・新年会

●2022年度「OBOGによる仕事紹介」報告

稲門建築会OBOGと学生が語り合う場の提供をテーマにOBOGによる仕事紹介」が12月3日に開催されました。この2年間はコロナ禍により対面開催が叶わず試行錯誤が続いておりましたが、第2部の企業紹介においては、企業側、学生側からも対面で実施して欲しいという声が多く、3年ぶりの対面開催となりました。

第1部の業種紹介については、過去2年間実施した、業種紹介動画の評判がよく、今回も、企業の皆様にお願いし、2週間の視聴期間を設けて学生に閲覧してもらいました。コンパクトにわかりやすく要点がまとまっている動画も多く、建築学科出身の先輩達が、様々な分野で活躍している姿がよくわかる動画となっています。学生の皆さんも今後の自分の進路を決める上で大変参考になるのではないでしょうか。

第2部の企業紹介では、58社の企業に参加いただきました。冒頭に石田先生から開会のご挨拶をいただき、14時からのスタートとなりました。63号館の1F情報ギャラリーと2Fの203～205教室を会場とし、16時30分までの2時間30分の時間でしたが、開催と同時に多くの学生が来場され、各企業ブースは学生で一杯となりました。

参加された学生の来場数は161名。3年ぶりの対面開催という事もあり、会場は活気にあふれていました。なるべく多くの学生と面談してもらえるように、15分を目安に交代してもらうよう促しましたが、OBOGと熱のこもった会話ができたのか、15分では時間が足りないという声も多く聞かれました。学生からの質問は仕事の内容はもちろんですが、企業の福利厚生や残業時間や休日の有無など、働き方についての質問も多く、OBOGとの懇談ならではの本音の話ができたのではと感じました。次回開催にあたっては、一人の時間を多く確保でき、様々な企業のOBOGと懇談ができるような運営を検討し、益々充実した会となるよう、活動の幅を広げていきたいと思います。

●2022年度「第2回職域幹事会・講演会・新年会」報告

第2回稲門建築会職域幹事会が1月27日に開催されました。56号館104教室にて対面とリモート併用で開始致しました。まず初めに、職域幹事会では、各委員会からの報告に続き、会員委員会からOBOGによる仕事紹介の結果報告を致しました。続いて、合同クラス会の実施報告があり、当日のイベント状況や職能図鑑制作における実績報告などがありました。最後には今年度日本建築学会代議員、常議員に立候補されている方のご紹介があり、職域幹事会の報告は一旦終了となりました。

その後、「種を蒔く人―ひとつなぎの建築をめざして―」というタイトルのもと、渡邊大志先生による講演会に移りました。4人の偉人を紹介しながら、渡邊大志先生のデザインとの向き合い方、考え方などの深い考察について発表いただきました。建築をどのようにデザインし、次の世代につないでいくのかデザインの原点を探るようなお話で大変興味深い内容でした。講演会は対面参加者約50名、Web参加者83名となり、計130名以上の方に講演会を視聴していただくことがきました。

亀井会長の乾杯のご挨拶により、新年会がスタートしました。有賀先生より学園の近況報告をいただき、続いて中谷先生からは建築学科の近況報告がありました。

最後には後藤研の各務さんによる校歌斉唱、エール交換を行い、車戸副会長の中締めで新年会は閉会となりました。リモート併用とはなりましたが、対面で報告会や講演会が実施でき、その場の雰囲気や臨場感などリアルでの開催の良さを改めて実感できた会となりました。

堀圭吾（会員委員長／苗1988）

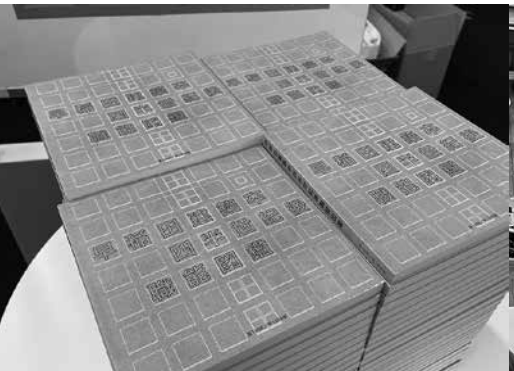
合同クラス会
二〇二二報告

2022年度の合同クラス会は57号館202教室にて「早稲田建築卒四半世紀後職能図鑑」出版記念会及び「8職能8名による座談会　続・私のプロフィール　早稲田建築Q6」、終了後ホワイエにて「現役生とのグループ座談会」を開催しました。事前に卒業から25年経過した幹事1996年学卒代の現在を取りまとめ、同期内で編集チームを構成、79名の職能を紹介する冊子を発行、現役の建築学科生、院生全員に授業や研究室にて手渡し致しました。発行にあたり、1冊購入することで1冊が現役学生に渡すことができるという設定にて稲門建築会職域幹事皆様を始め沢山のOBOGの方々に支援購入をしていただきました。お陰様で稲門建築会員が在籍する多くの企業各社に広告協賛いただき充分な資金が集まり、発行・配布を行う事ができました。皆様の御協力に実行委員一同、心より感謝しております。

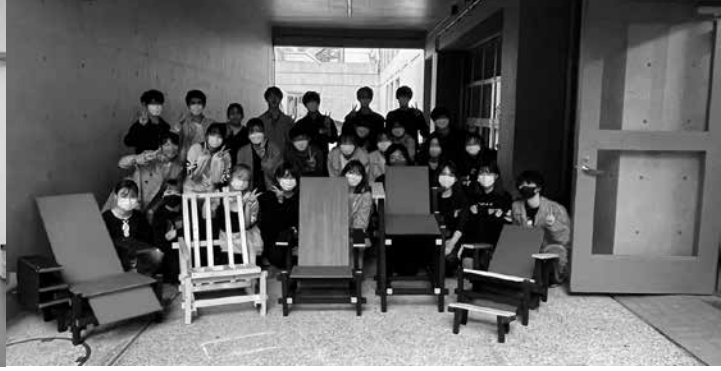
当日は、冊子を元に8職能8名とMC2名にてパネルディスカッション形式で各々の職能を深掘りした上で、早稲田建築Q6という質問にパネリストが回答し、当時の授業や課題、印象に残った教授の方々の言葉や今の仕事につながっていることなどを熱く語り合いました。会場にて御観覧いただいていた中川先生からもコメントをいただき、課題の講評会を受けているような懐かしい感覚を味わうこともでき大変盛り上がりました。ホワイエに場所を移して開催されたグループ座談会では熱心な現役学生達が図鑑掲載者に直接質問を投げかけ小一時間じっくりと交流を図りました。

今回の職能図鑑作成により、同期の現在を共有し、現役学生に向けての羅針盤として、また早稲田建築の魅力を表現するツールとして一つの可能性を示すことができたのではないでしょうか。今後は更に25年後の70歳代に「卒半世紀後職能図鑑を作成できるかもしれません。また、後に続く代にも無理のない形で今回のような企画を継承いただければ、非常に有意義なアーカイブが整っていくのではないかと期待しております。

興水結子（実行委員長／苗1996）



写真右から：OBOG仕事紹介、合同クラス会1部実施風景、早稲田建築卒四半世紀後職能図鑑。



建築展報告

建築展は辿るのも困難なほどに長い歴史をもち、ものづくりを通して机上では学べない体験を積み重ねてきた。

コロナ禍で一時は活動が存続できないことも危ぶまれたが、ここまで先輩方が灯し続けてきた建築展の火を絶やしたくない、という強い想いから私たちは今年度の活動を始めた。

私が年度始まりにまず取り掛かったのは、建築展がこれから10年、20年と長く続くことのできる土壌を作ることであった。

歴代の先輩方から話をうかがうと、どの年も最高学年である学部3年を中心とした活動であることがわかった。

しかしコロナ禍を経て、最上級生のみが中心となって活動していると、後々後輩たちが苦しい思いをするということを身に染みて知っていたため、学部1、2年生を積極的に取り込んだシステムに変更することから始めた。早稲田建築の特徴でもある、学年の垣根を超えて物事を成し遂げるその姿勢を建築展の活動にも取り入れたのだ。

本年度は、リートフェルトの椅子の再考、木材加工から考える利用者目線に立った棚作りWS、地場産業の製紙業の廃材から考える空間インスタレーション、理工展におけるキャンパスの意図してできた不思議な空間を生かしたインスタレーションの4つの企画を計画し、設計から施工まで、学生のみで行った。果たしてモノとしての完成度がいいものであったかと言われると、真っ直ぐ首を縦に振ることはできないが、建築展の火を灯し続けるために、その火に燃料を注げたことには自信を持って首を縦に振れる。

こうしてつなぎ止めたものが実際に続いているかどうかは将来になってみないとわからないが、2020年度コロナ禍で入学した私たちが成せることは達成したと胸を張って言える。

このように学生が自由に活動を続けられるのも、日々稲門建築会の皆様のご支援あってのことです。末筆ではございますが、不安定な状況下でも私たちの活動を応援してくださったこと、心より感謝申し上げます。今後も温かく見守っていただけますと幸いです。

関根敬介（建築展代表／学部3年）

写真右から：
リートフェルトの椅子の再考、木材加工から考える利用者目線に立った棚作りWS、理工展における企画「不可思議キャンパス」のPR画像。

芸術展報告

11月初旬に芸術学校の作品展示会である「芸術展」が開催された。本展示会では、芸術学校学生が主体となり、企画から運営の全てを一貫して執り行う。展示内容は2022年度の春期から夏期に出題された課題のスケッチや図面、模型等の成果物を中心とし、芸術学校の魅力を学生の作品を通して対外的に伝えることができる貴重な機会となっている。

今年度は、事前に新型コロナウイルス感染症によるイベント活動制限が緩和されたということもあり、非常にリラックスした雰囲気の中での開催となり、2日間の累計来場者数も約600名に上った。

今年度は、芸術学校のカリキュラムコンセプトの「すきになる」「やってみる」「やりとげる」を踏襲し、学年順に観覧できる動線計画で、学生の習熟度合いと教育理念を体感してもらう構成とした。展示プランは各学年がエリア計画を担当したため、それぞれが自由な着眼点を持ち展示空間に創意工夫を凝らした。

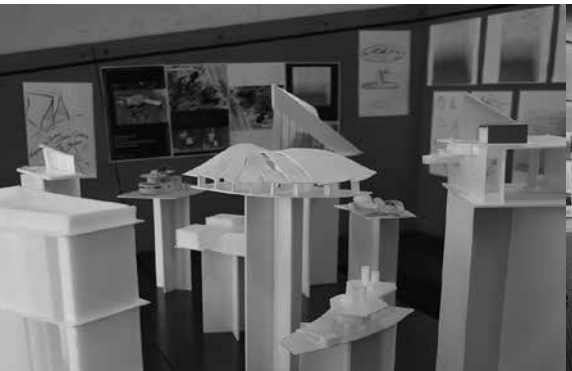
芸術学校は幅広い年齢層と多種多彩なバックグラウンドを持つ学生が集まる稀有な場所であり、その多様性を活かした企画や運営が芸術学校「らしさ」につながっている。

しかしながら、我々が伸び伸びと活動ができるのも全ては、我々学生の活動に対して多大なるご支援を下さる稲門建築会の皆様をはじめ、ご指導下さる先生方、陰ながらご支持下さる事務所職員の方々のお陰である。この場をお借りして皆様に感謝申し上げたい。

今後とも、学生らが芸術学校らしさを発揮できるようにご指導いただければ幸いである。

邊栄祐（芸術展実行委員長）

写真右から：
51号館学生ラウンジ南側展示、51号館学生ラウンジ北側展示、課題模型展示。



稲門の風　十八回

特別企画
2050年を見据えて飛躍を目指す早稲田のキャンパス

後藤春彦　早稲田大学理工学術院教授（苗1980）

およそ3年に渡り続いてきた日本における新型コロナウイルス感染症の流行もようやく制限解除の兆しをみせ、訪れたニューノーマル社会の中で国内外の人流や都市活動も本格的に再開しつつある。早稲田大学はコロナ禍におけるリーディングユニバーシティとして様々な対策を矢継ぎ早に繰り出してきたわけだが、その間における社会や学習環境の変化を踏まえて、未来の大学教育やキャンパス像についても青写真を描きつつある。理工系の学部学科が集う西早稲田キャンパスは、その先駆けとなる期待をはらんだ大学のリーディングプロジェクトであり、その主要コンセプトや今後のキャンパス全体をまきこんだ周辺まちづくりのビジョンについて、早稲田大学副総長としてキャンパス企画を担う後藤春彦先生にお話をうかがった。

松井章一郎、森田彩香（広報委員会）

●早稲田大学／西早稲田キャンパス
52、53、54、59号館建替計画
建築主：学校法人早稲田大学
設計：株式会社日建設計一級建築士事務所

コロナ禍から見出された新しい教育スタイル

2019年のコロナ禍以来、早稲田大学は“No one will be left behind（誰一人、取り残さない）”を原則に、リーディングユニバーシティにふさわしい対策を打ち出してきた。その一環として、学生がリモート教育環境を整えるための緊急支援（給付金やPC・Wifi機器の貸与）や講義の配信コンテンツを充実させてきたが、教育方法を研究する本学の大学総合研究センターが中心となって実践している「反転授業」という、コロナ禍による授業のオンライン化の経験値によって各教員が取り組み易くなった教育システムに大きな可能性を見出している。

新しい教育スタイルから導かれる未来のキャンパス像

「反転授業」は座学を自宅な

どのリモート環境で受講し、その実践やディスカッションのためのフィールドとして大学キャンパスを活用することを目指している。そのためキャンパスは画一的な大教室に代わり、むしろ多様なアクティビティや偶発的なコミュニケーションを誘発する、場所もスケールも異なる活動スペースの集合体へと変容していくことが予想される。現在はその過渡期であり、現有する敷地の高度利用化が一段落した暁には、キャンパス周辺地域の空き店舗や未利用地を活用しながら大小様々な大学の機能が地域に埋め込まれていくような周辺地域も含んだキャンパス整備の方向性を思い描いている。

２０５０年を見据えた将来は、大学のアクティビティが地域に違和感なく染み込んでいくとともに、大学の研究成果が社会実装されるようなまちづくりを目指したい。それこそが大学街に対する早稲田大学のスチュワードシップの実践に他ならないと考えている。

新しい早稲田の先駆けとなる西早稲田キャンパス

一方、理工系が展開する西早稲田キャンパスは、大学の将来像を具現するリーディングプロジェクトとなる可能性がある。これまで北側の戸山公園に対する日影規制の影響で増築困難な状態が続いており、尾島俊雄学部長時代よりキャンパスの狭隘化の解消が喫緊の課題であった。しかしながら東京都建築審査会の個別審査で特例許可を得ることで、現状の日影を悪化させない範囲での高度利用が可能となる見通しがついた。これにより、キャンパス南側の52、53、54、59号館の高層化を図り、学生の教育環境の充足と最先端の教育・研究拠点の整備を同時に推し進めることになった。

その中で、昭和42年に建築学会賞を受賞した安東勝男先生、松井源吾先生の設計思想の継承にも取り組んでいる。例えば、2、３００ｍスパンの規律あるグリッドを踏襲し、正門脇にある52号館は残しつつ、その上空を跨ぐ形で新しい教育・研究棟を増築する計画としている。新しい建物の低層部には学生に開かれたラウンジや教室を配置し、将来の変化に応じてフレキシブルな対応が可能なプランとしている。高層階にはラボ施設群をフラットに配置し、地下階には地下鉄副都心線からのネットワークを引き込む計画である。そして高層と低層の界面となる４階には、正門上空をつないでキャンパス南側を２３０ｍにわたって「（仮称）パークフロア」として一体化し、カフェテリア、ラーニングコモンズなどを配置する。キャンパスを利用する全ての人々がこのフロアを介して活発に行き交うことで、偶発的なコミュニケーションや新しい発見を共有できる場所づくりを目指している。

２０５０年の未来に向けて

西早稲田キャンパスの整備計画は、今後約10年の歳月をかけて実現していく見通しである。その間もキャンパスは現役稼働を続けながら、52号館の増築を皮切りに段階的な建替を進めていく。２０３０年から２０５０年にむけて世の中も大きく変化していく時代ではあるが、それとともに西早稲田キャンパスが新しい姿に進化していく姿を、学生及びＯＢＯＧの皆様に見守っていただければ幸いである。

下：４階レベルのパークフロア。キャンパス南側を２３０ｍにわたってつなぐ。

春の大会ご案内

国内で新型コロナが確認され早3年になりました。コロナ禍の生活も定着し徐々にコロナ以前の日常も戻りつつあると感じられる今日この頃です。さらに5月にはコロナがインフルエンザ同等の5類相当に分類されることが政府から発表されたことにより、社会活動の活発化が期待される中で、来る6月2日に今年の稲門建築会春の大会が開催されます。政府の方針を踏まえ対面形式での開催を予定しています。コロナ禍での大きな制約を受けながら活動してきた稲門建築会も、新たな一歩を踏み出す大会になると思います。大会では2022年度活動報告、収支決算報告、会計ならびに業務監査報告が行われ、さらに2023年度役員選任、活動基本方針、収支予算など稲門建築会の活動を知っていただく良い機会になります。

また学園の近況報告や特別功労賞受賞者の発表と各受賞者からのコメントなども聞けると思いますので、是非皆様にご参加いただきたいと思います。

特別講演につきましては、現在事業委員会で企画を検討しております。昨年は東京都現代美術館で開催された「吉阪隆正展　ひげから地球へ、パノラみる」に呼応する形で「なぜいま吉阪隆正か?」と題した特別講演をリアルとオンラインを併用する形で行いました。コロナの状況は予断を許しませんが、今年の特別講演もリアル・オンライン併用で行う予定です。内容につきましては決まり次第お知らせさせていただきますので、皆様是非、会場に足をお運びいただければと思います。

齋藤俊一郎（総務委員長／苗1990）

合同クラス会予告

2023年11／4（土）開催予定

毎年、会員の皆様が楽しみにしてくださっている「早稲田大学合同クラス会2023」の企画が1997年卒業生有志を中心に進んでおります。開催日は理工展や芸術展に合わせ11月4日（土）とし、場所は西早稲田（理工）キャンパスを予定しております。

ご卒業生の方々や現役の学生をつなぎ、喜んでご参加いただけるような企画を考え、皆様をお招きしたいと思っております。まだコロナ禍でもありますので柔軟に対応しながら、企画が決まりましたら順次お知らせいたしますので、どうぞお楽しみに。秋には、懐かしいキャンパスで皆様とお会いすることを楽しみにしております。

三浦丈典、藤井由理（合同クラス会2023実行委員代表）

主な会務の報告

二〇二二年十〇月〜

〔会議〕

- 第3回理事会Web併用…11／18
- 第2回職域幹事会Web併用…1／27
- 特別功労賞選考委員会…2／24
- 第2回評議員会Web併用…2／28
- 企画運営会議Web併用…3／17

〔活動〕

- Web海外セミナー坂本知子氏…10／8
- 秋の大会／合同クラス会…11／6
- 建築展・芸術展支援…11／5、6
- 旧渡辺甚吉邸見学会…11／19
- OBOGによる仕事紹介…12／3
- 九州支部受賞者の集いWeb併用…12／3
- 設計製図Ⅱ第1課題、第2課題公開講評会（懇談会中止）
- 設計製図Ⅲa-1、Ⅲa-2、Ⅲb課題公開講評会（懇談会中止）
- 特別見学会（タイ世界遺産）…1／5〜10
- 渡邊大志先生講演会・新年会（Web配信）…1／27
- 日本建築学会代議員・常議員立候補者支援…2月
- 近畿支部交流の夕べ…2／27
- 学部・大学院学位授与式（会長祝辞、稲門建築会賞授与）…3／26
- 芸術学校卒業式（副会長祝辞、稲門建築会賞授与）…3／26
- メールマガジンの発行…10、11、12、1、2、3月号
- ニュース114号発行…10／15

訃報

左記の方がお亡くなりになった旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

2022年9月1日〜2023年2月28日受付分

大林原（苗1951）	2022.9.16
神山幸弘（苗1951）	2022.3.8
広瀬守（苗1952）	2022.3.9
原篤輔（苗1954）	2022.5.2
山村泰三（苗1956）	2018.3.4
湯本権六（苗1957）	2022.8.21
山田篤（苗1957）	2021.11.6
青柳幸人（苗1958）	2022.7.18
真柄敏郎（苗1958）	2022.11.1
佐藤豊作（苗1959）	2018.11.28
高橋敏夫（苗1959）	2021.8.17
岩本秀雄（苗1959）	2022.4.1
木原一成（苗1959）	2021.10.17
阿部勤（苗1960）	2022.1.10
小林正春（苗1960）	2022.10.14
佐藤正樹（苗1960）	2022.7.6
鶴見俊輔（苗1961）	2022.3.23
風間了（苗1962）	2022.11.17
長谷川秀三（苗1962）	2022.1.8
斎藤義（苗1962）	2022.3.22
関根秀次（苗1962）	2023.2.4
永田裕（苗1963）	2022.3.6
早川邦彦（苗1966）	2022年
村山博美（苗1966）	2022.11.2
福西康充（苗1969）	2022.10.8
和田繁（苗1969）	2022.11.21
平田哲（苗1970）	2021.1.30
渡辺俊彦（苗1974）	2021.5.7
金田進（苗1976）	2021.7.17
川端敏彦（苗1980）	2016年
砂盃隆之（苗1983）	2020.5
日下部英一（友1952）	2022.6.29
渥美光純（友1955）	2019.11.22
中島璋治（友1968）	2022.2.27
樋口玲子（友1978）	2019.3
平塚博（工1945）	10年位前
青西彰（工1948）	2022.2.23
野崎直茂（工1950）	2016.1.2
榊原宏治（甍1948）	2020.10.29
塩崎達成（甍1948）	2012.7.3

名誉教授の訃報

新谷眞人名誉教授（構造）	2020年8月23日（享年76歳）
曽田五月也名誉教授（構造）	2021年9月20日（享年74歳）
神山幸弘名誉教授（施工）	2022年3月8日（享年94歳）
風間了名誉教授（構造）	2022年11月17日（享年83歳）

我々をご指導いただいた4名の名誉教授のご逝去の悲しいお知らせをすることになりました。本来であれば各研究室の代表の方から追悼文をいただくべきところですが、先生を良くご存知の方々に一言いただきました。これまでのご指導に心より感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

新谷先生は非常に聡明な方であった。じっと遠くを見つめて思案にふける姿は今でも目に焼き付いている。（山内哲理・苗1975）

思い出す曽田先生の姿はいつも笑顔です。専門的なお話をされている最中でも、人と人のつながりを大事にされていたのだと思っています。（楠本玄英・苗2001）

神山先生の木造建築物そして維持管理の大家として長年ご活躍されたお姿とお人柄がしのばれます。（堤洋樹・苗1997）

風間先生は経済成長の建築ブーム期に実験に基づいた振動解析に多数従事され、基礎構造の実験や設計、解析にてご活躍されました。（山田眞・苗1975）

事務局便り

会の活動は少しずつですがリアルでの開催を心がけております。OBOGによる仕事紹介は3年ぶりに対面で開催し、対面でしか伝えられないものがある事を実感いたしました。一方、Web海外セミナーは好評を博しております。2023年度は対面とWebをより充実させたいと思います。そのためにも会費の納入とメールアドレスの登録にご協力をお願いいたします。

鴇田隆（事務局長／苗1973）

編集後記

新キャンパスでお話があった「偶発的なコミュニケーションや新しい発見」は、自ら設計した文化施設でもテーマで共感でき、キャンパスでの前向きな取り組みに益々完成が楽しみとなりました。5年務めました広報委員長を来年引き継ぎます。振り返れば『WA』と早稲田建築ニュースのデザイン改訂を2年目に取り掛かり、昨年までにメルマガや封筒等稲門建築会の広報関係全体のデザイン改訂にまで至りました。会長を始め、稲門建築会の皆様のご協力に感謝致します。

兒玉謙一郎（広報委員長／苗1990）

News of WASEDA Architecture No.115
2023年4月15日発行
発行者＝稲門建築会会長：亀井忠夫
編集者＝稲門建築会広報委員会（委員長：兒玉謙一郎）
発行所＝稲門建築会
〒169-8555
東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学55号館S棟401
電話・ファックス
03-3208-0640
HP＝https://www.toumon.arch.waseda.ac.jp/
Email＝wap@toumon.arch.waseda.ac.jp
制作＝株式会社建築メディア研究所
フォーマットデザイン＝岡﨑真理子
ⓒ稲門建築会